超次元ゲイム ネプテューヌmk2 Golm short story

風音 ツバキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超次元ゲイム　ネプテューヌｍｋ２　Ｇｏｌｍ　ｓｈｏｒｔ　ｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ９６９３Ｙ

【作者名】
風音　ツバキ

【あらすじ】
超次元ゲイム　ネプテューヌｍｋ２　Ｇｏｄｄｅｓｓ　ｏｆ　ｌｏｓｔ　ｍｅｍｏｒｉｅｓのショートストーリー集です。
主にゲハピクのイベントやオリジナルを書いていくと思います！

風邪引き女神（前書き）

夜のテンションで思いついたのを書いたらこうなったでござる。

ステ×フウ百合注意です！

時間軸は女神失踪→原作開始の間です。

１１／２９

ちょっと書き足しました。

風邪引き女神

「けほっ…けほっ……はぁ、無理し過ぎたかなぁ…」

とある日の出来事。

わたしは、修行で無理をしてしまって風邪を引いてしまった。

朝起きた時から頭がぼーっとしていて、朝ごはんを食べてる途中で倒れちゃったのだ。

それで、ミナさんに自室に運ばれて今日は安静にするようにと言われた。

はぁ…三人に心配かけちゃったなぁ…

それにしても、女神も風邪引くんだなぁ…

なんて、どうでもいいことを考えていると、部屋の扉がコンコン、とノックされる。

「けほっ…どうぞー」

咳き込みながらそう言うと、入ってきたのはステラだった。

「あ、ステラ…どうしたの…？」

「いやぁ、フゥちゃんが心配になってねー」

どうやらステラはわたしを心配して様子を見に来てくれたみたい。

「そうなの…？　でも、うつしちゃうと悪いから余り近寄らない方がいいよー…」

「ん、そだね」

そう答えながらも、何故かベッドに腰掛けてくるステラ。

…そういえば、二人はどこに行ったんだろ？

「ね…ステラ。ロムちゃんとラムちゃんはどこ行ったの？」

「二人ならミナちゃんに頼まれておつかいに行ったよ。二人ともフゥちゃんのこと心配してたけどね」

「そう、なんだ…けほっ…」

やっぱりみんなに心配かけちゃってるなぁ…ダメだな、わたし…

「大丈夫？　そういえば薬は飲んだの？」

「はぁ…ふぇ…？　く、薬？」

「…その顔はまだ飲んで無いんだね」

うぐっ…バレちゃった…

うぅ…あの風邪薬、すっごく苦いからイヤなんだよね…

「ダメだよ？　ちゃんと飲まなきゃ直るものも直んなくなっちゃうよ」

「ぅ～…でも、苦いのイヤなんだもん…」

自分でも子供だなぁって思う。けどアレだけはホントにイヤ。

「ほら、良薬口に苦しって言うでしょ？」

「それでもヤなものはヤなのっ！　けほっこほっ！」

「あー、ほら。安静にしてなきゃダメだよ」

「ぅー…」

身体を起こしてムキになっちゃっていたら咳き込んでしまい、ステラに横になるように言われ、横になる。

ぅ…また、頭がぼーっとしてきた…

「ふ、フゥちゃん？　大丈夫？」

「だ、大丈夫ー…」

「ああもう、無茶するから悪化しちゃったんだよ…もう…」

朦朧としていく意識の中、視界の隅でステラが何かをしている姿が見えた。

「ステラー…？　なにしてるの…？」

「んー、苦いんなら、甘くしちゃえばいいって思ってねー。フゥちゃん、ちょっと起きれる？」

「う、うん…」

何をする気なのかさっぱりわからないまま、言われたとおりにまた身体を起こす。

「それじゃ、行くよー」

「行くって何を…んむっ！？」

それは突然の出来事で、一体何が起こったのかよくわからなかった。

「ん…む…んぅ…」

「…ッ…んんぅ…！　むぅ…ッ！」

ただ、ステラの顔がすっごく近くにあって、口が塞がれて、すっごく苦い物がわたしの口に流し込まれた、ということだけはわかった。

流し込まれていく苦い味に、思わず涙が零れそうになる。

「…ぷぁっ！　げほっけほっ…！　な、なにするのっ…！」

「だって、フゥちゃん苦いの嫌なんでしょ？　だからちょっとでも気を紛らわそうと思って」

そう答えるステラの目にも、うっすらと涙が浮かんでいた。

「だ、だだからって、その、なんで口移しなのさっ…！　風邪うつっちゃうよ…！」

「これしか思いつかなかったんだもん。それに、私は魔導書だから風邪なんて引かないよ」

「そ、そういう問題じゃなくて…！」

うぅ…なんだか余計に身体が熱くなった気がするよ…

「っと、フゥちゃん汗かいてるね。ちゃんと拭かないとまた悪化しちゃう」

「ちょ、ステラ…っ！？　何しようとしてるの…！？」

「フゥちゃん風邪でまだぼーっとしてるでしょ？　それに薬が効いてきたら眠くなっちゃうだろうから、私が拭いてあげるよ」

「いやいやっ…！　それくらい自分でできるってばぁ…」

そう言って必死に抵抗してみるけど、やっぱり風邪のせいでうまく力が入らなくて、パジャマを脱がされてしまう。

「ほら、大した抵抗もできないくらいなんでしょ？　だからフゥちゃんは楽にしててていいんだよ」

ステラはそう言って、あろうことかわたしの身体をペロリと舐めてきた。

「ひゃぅっ！　す、ステラ…！？　何して…くぅんっ！？」

「んむ…何って、フゥちゃんの汗を拭いてるんだよ」

「んく…っ…ふ、拭くにしたって…やぅっ！　何も舐めなくたって…ひぅっ…！」

必死に押し退けようとするけれど、風邪で頭がぼーっとしているせいでうまく力が入らない。

「拭くもの取って来てる間に悪くなったら大変でしょ？」

「だか、らってぇ…はぅぅ…んっ…」

だ、ダメ…なんか、力が入らないよぉ…

「すてらぁ…もういぃ…もうだいじょうぶだよぉ…」

「んちゅ…大丈夫じゃないよ、まだ汗まみれだよ」

「やぁ…だめ…汚いよぉ…」

それでも抵抗を続けるけど、もはやステラのなすがままになっていた。

「そんなことないよ、ほら、安静にしてて」

「ふぁうっ…！　あ…やっ…す、すてらぁ…」

「…ぁ…う…？」

気が付くと、わたしはベッドで布団をかけられて眠っていた。

時計を見てみると針は朝の七時を刺していて、あれは夢だったのか、と思いかける。

だけど、日付を見ると一日経っていて、やっぱりホントにあったことなのかなぁーと思って顔が熱くなる

昨日の出来事はもう途中から頭がぼーっとして全身の力も入らなくて意識も朦朧として、よくわからないうちに意識がなくなっていた

ので朧気にしか覚えていない。
でも、すっごく恥ずかしい目にあったということだけは覚えている。

「んぅ…」

でも熱はホントにあったのか、と言う感じがするくらいになくなっていて、身体も軽くなっていた。
風邪って薬飲んで安静にしてたら一日で直るものなのかなーなんて思っていると、部屋の椅子に誰かがいるのに気が付いた。

「あ…ステラ…」

椅子に座っていたのはステラで、とても気持ちよさそうに眠っていた。
きっと、昨日からずっと看病していてくれたのかもしれない。

「…でも、あれは恥ずかしすぎるよ…」

昨日のことを再び思い出して、また赤面。
…でも、ステラにはちゃんとお礼を言わないと、ね。

わたしはベッドから出て、椅子で眠るステラに近寄り、

「ありがと、ステラ」

そう言って、ステラの頬にキスをした。

うぅ、眠っててもやっぱりちょっと恥ずかしいや、えへへ…

そんなことをしてまた顔が熱くなってきたので顔を洗おう、と思い、

わたしはステラを残して部屋を後にした。

「…どういたしまして」

部屋を出るとき、後ろからそんな声が聞こえた気がした。

風邪引き女神（後書き）

ツバキ「……」
黒フウ「……」
ツバキ「……これ、大丈夫かな…まだＲ－１８じゃないよね…？」
黒フウ「……知らない…」

薬制作な女神（前書き）

時間軸はネプギアパーティーｉｎ～二度目のラスティション到着の間です。

スカイリムにはまってるせいで執筆時間が…

薬制作な女神

「じゃあ次、それとそれを混ぜて」

「えっと…これと、これ、だね」

ネプギアさん達のパーティーに加入し、ラステイションに向かう途中の街の宿でわたしはステラに教えてもらいながらある事をしていた。

「フウちゃん、何してるの？」

そこにネプギアさんがやってきて、何をしているのかと聞いて来る。

「あ、ネプギアさん、やっぱり気になるんだ。えっと、これはね…」

「魔法薬の作り方をフゥちゃんに教えてるんだよー」

わたしが言おうとするとステラが代わりにネプギアさんに教える。

そう、今わたしは素材も溜まってきている事なんだしー、とステラに言われ、魔法の薬を作っている。

「魔法薬？」

「うんー。色んな素材を混ぜて作る魔法の薬ー。能力上げたり攻撃に使ったりー、色々なのがあるよー」

疑問に思うネプギアさんにかいつまんで説明するステラ。

「へぇー、なんかすごいね」

「丁度今フゥちゃんが作ってるやつ終わったら試験運用する所だったしー、ネプギアちゃんもどんなのか見てみるー？」

「え、いいの？」

「ちょっと危険が伴うけどねー。ま、大丈夫ー」

「それじゃ、いいかな？」

「どうぞどうぞー。あ、フゥちゃん終わった？」

「うん。二人が話してる間に終わったよ」

二人が会話してる間も黙々と作業を続け、作った液体を試験管に入れてしっかりと栓をする。

漏れると危ないからしっかりと、ね。

「じゃー、町のはずれに行こー」

そう言ってステラは部屋からでていき、わたしとネプギアさんはステラに続くように宿を後にした。

「えーと…よし。それじゃフゥちゃん、あれにさっき作った赤い薬瓶投げてみてー」

町のはずれの人気の無い場所まで来ると、ステラがスライヌ（動いてない）を召喚し、それに瓶を投げろと言って来る。

「うん。わかったよ」

「あ、あまり近付き過ぎないようにね。危ないから」

「はーい。…えいっ！」

ステラの注意を聞いて、少し離れた場所からスライヌに向けて赤い薬瓶を投げつける。

スライヌに当たり瓶が割れた瞬間、スライヌを中心に中範囲が爆炎に包まれた。

「す、すごい…」

「魔符よりも威力高いね、これ…」

「まぁね。でも取り扱い注意だからね。間違って自分で飲んじゃったりしたら自分が爆発するから」

「こ、怖いね…」

とりあえず、魔法薬を使う時は絶対に間違えないようにしよう、うん。

ちなみにこの後、ステラがわたしのマントの内側に何個か薬瓶を入れられるようなポケットを付けてくれた。

【フウは『試験薬（各色）』を覚えた】

薬制作な女神（後書き）

―技紹介―

○試験薬

不思議な薬の入った試験管を敵に投げつけたり、自分が飲んだりする。

色によって効果は様々。

赤：爆炎を起こす。

青：水球を作り出す。

水：一瞬で凍りつかせる。

緑：突風を巻き起こす

黄：地面から岩が突き出る。

紫：雷球を作り出す。

白：拘束しつつ光属性の爆発ダメージを与える。

黒：紫色の炎で焼き尽くす、数ターン持続ダメージ。

深緑：自分に使用。使うと全回復し全ての能力が少し上がる。二度まで重ね掛け化。三回目は爆発し、ダメージ&上昇能力消滅。

気分で増えるかも？

Ｘｍａｓな女神（前書き）

急ピッチで書き上げたので残念クオリティです。

読む際はご注意を。

Ｘｍａｓな女神

「ロムちゃんフウちゃん、今日はクリスマスよ！」

「楽しみに…してた…」

「ふふ、サンタさん。来るといいね」

ルウィーのある日の事。

今日はやけにラムちゃんとロムちゃん、というより、子供が元気になる日だ。

なぜかというと、今日はクリスマスの日だから。

クリスマスといったら、子供達にとっては欲しい物が貰える日だからね。

「でも、わたしの所にも来るのかな？」

「来るんじゃないかなー？　過去の記憶とかそういう問題じゃなくて、今のフゥちゃんは子供だしー」

「…遠回しにちっこいって言われてる気がするんだけど？」

「気のせいだよー」

ぼそりと呟くと上から飾りつけをしているステラ（本の精霊形態）がそんな事を言って来た。

なんだか気にしてる事に触れられた気がして、ステラをジト目で見ると視線を逸らされる。

「でも、なんでわざわざルウィーでクリスマスパーティーをするんでしょうね？　他の国も積雪くらいしてるのに」

「まぁ、冬の行事は年中雪の積もってるルウィーな感じかするからじゃないかな？　どちらにしても、今更気にしたって仕方ないよ」

疑問に思ったのかツキちゃんがそんな事を言ってきて、わたしはそう答えた。

「それもそうね。さて、と。ミナー、こっちは終わったわよー」

「あ、ありがとうございます。ではこちらも少し手伝っていただけますかー？」

「りょうかーい」

納得しつつミナさんの所へ行って準備を進めるツキちゃん。

わたしも手伝おうとしたんだけど、今日はいい、と言われて何もし

ないでいる。

むー、でも待ってるだけっていうのはなー、わたしも何か手伝いたいよ。

でも、ラムちゃん達とゲームもしなきゃいけないし…うむむ…

「やほー！　ねぷ子サンタがやってきたよー！」

「お邪魔しまーす」

「わぁー！　素敵な飾りですー」

「コンパ、あまりはしゃがないの。みっともないわよ？」

なんて悩んでいると、そこにプラネテューヌご一行が到着した。

ネプテューヌさんだけなぜかサンタ服だけど。

「…あなた達が一番乗りね、ネプ…何その格好…」

「見て分からないかなー、ねぷサンタだよ！」

「いやー、サンタっていうのはわかるけど、そういう意味で言ったんじゃないと思うけどー…」

ブランさんの質問にネプテューヌさんは胸を張りながらそう答え、上の飾りつけを終えたステラが本に座ってふわふわと降りながらそうつっこむ。

「やっぱ流石にイストワールは来てないかー」

「はい…やっぱり仕事が忙しいみたいで…」

「あー、いいのいいの、ネプギアちゃんがそんな顔しなくてもー」

ステラがイストワールさんが来てないのに少しだけ残念そうな顔をしているとネプギアさんが申し訳なさそうに言い、慌ててステラが問題ないよーと言う。

やっぱり本同士だから仲良いのかな？

で、その後も続々と人が来て…

「到着、っと…あら、ネプテューヌ達に先を越されちゃってたみたいね」

「あ、ノワール！　やっほー！」

「ってネプテューヌ、その格好は何？」

「だからねぷサンター！　見てわかるでしょっ！」

「ユニちゃーん！　元気にしてた？」

「え、えぇ。ネプギアこそ…って、別に風邪引いたりしてないかな
なんて心配してなんかないんだからね！？」

「素直じゃないですねー、女神様」

「いつものことですの」

「う、うるさいわね！」

「あら、この様子だとわたくし達が最後でしょうか？」

「そうみたいですね」

「ベール、遅いよー！」

「あらネプテューヌ、その格好はどうしたんですの？」

「だーかーらーねぷサンｔ（ｒｙ」

最終的にマジェコンヌを倒しに行ったメンバー全員が揃った。
ファルコムさんとケイブさんは連絡が取れなかったり街のクリスマ
スの催しとかで忙しいみたいで来れないみたいだったけど。

「でも、こうしてみると本当に多いよね」

「ぶっちゃけさー、全員でマジェコンヌフルボッコしてれば楽勝だったんじゃないかなー？」

「そんな事言わないの。だからアンタは駄目本なのよ」

「だ、誰が駄目本だよー！　誰がー！」

「…二人とも、折角のパーティーなんだから今日くらい仲良くしなよ…」

「「だれがコイツなんかと！」」

「…はぁ…」

ステラとツキちゃんがいつもみたいに喧嘩をし始めて、ため息をつく。

…まぁ、喧嘩するほど仲が良いって言うからいいのかな…？

「お姉ちゃん！　早く始めようよ！」

「…もうみんな、来たよ？」

「ああ、そう。…別に勝手に始めてても良かったんだけど」

みんなが集まって支度も終わった事で、ブランさんがラムちゃんと

ロムちゃんに急かされてそう言い、本を閉じて立ち上がる。

いやー、流石に勝手に始めるほど非常識な人達でもないと思うんだ…

それで、ブランさんが少しめんどくさそうに立ち上がったそんな時、

「そのパーティーちょっと待ちなさぁぁぁいッ！！」

「やれやれ、相変わらず騒がしいね」

「チカさん、扉は蹴破るものではありませんよ」

仕事で忙しくて来れないと言われていた、各国の教祖達が扉を蹴破って（蹴破ったのはチカさんだけ）入ってきた。

「あらチカ。仕事はもういいんですの？」

「はい！　お姉さまと一緒にこのクリスマスを過ごす為ならばあの程度、一瞬でしたわ！」

「ケイまで、アナタはこういうのあまり好かないと思ってたんだけど」

「なんかまた妙なこと考えてるんじゃないでしょうね？」

「心外だね、今回は純粋に楽しむ為に来たんだよ」

「おー、イストワールも来たんだー。てっきり『あと三日はかかりますよ？』とかいって仕事してると思ってたんだけどー」

「諜報部の方達が、今日くらいは皆さんで楽しんできてください、と言うものですから…というより、それは私の真似でしょうか…？」

なにはともあれ、こういうのは多いとそれだけ楽しいからいいの、かな？

それからは、まぁ、大騒ぎとしか言いようがないね…うん。

ネプテューンさん達が４人で食べ物の取り合いをしたり、ネプギアさんとユニさんがなんかイチャイチャしてたり、ロムちゃんとラムちゃんが食べ物を辛子入りにすりかえて大騒ぎになったり…うん、なんか疲れた。

まぁ、こういう日はこんな感じでいいのかもね、平和だし。

「フゥちゃーん！　こっちで一緒にあそぼーよー！」

「あ、うん！」

そんな様子を傍から見ていたらそう呼ばれたので、わたしはラムちゃん達の方へと向かう。

…折角取り戻した平和なんだから、楽しまないとダメ、だよね！

「さて、皆寝てるね？」

女神様達のパーティーが終わった後、言わずともわかるであろう赤と白の服を着て教会内に進入。

…ぶっちゃけ、サンタクロースって派手な泥棒に見えなくもないよね、本当に。

「よーし、それじゃ、欲しいものはなんでしょうー？　っと」

まずはツキちゃんとステラちゃんは、と。

「…『馬鹿本の命』『チェン娘の命』…、無茶言うなと」

まぁ、とりあえず砥石と本を五冊くらい置いておこうか。

さて、次次…

「『平和な一日』…はは…しょっちゅう書いた本とかに落書きされてるからね…苦労してるなー…」

じゃ、女神様には、とりあえずお説教用ハンマーでも差し上げよう、これなら全力で叩けるよ、やったね。

で、後は三人…相変わらずこの三人は仲が良いねー。えぇっと…

「『新しいゲーム』『サンタクロース』…前者はともかく後者、絶対捕まえる気だろ…」

えーと…何があったっけ、とりあえずマ〇オカート7でいいか、後はサンタ人形っと。

最後、フウちゃんは…

「『これからも、皆と一緒に笑って暮らせるように』…か、真面目だねぇ～」

でもま、フウちゃんらしいっちゃぁらしいかな、ふふっ。

さて、ではそろそろお暇しようかな。

「と、では最後に…メリークリスマスーっ♪」

Ｘｍａｓな女神（後書き）

ツキ「…砥石？　何に使うのよ…チェーンソーでも研げって？」
ステラ「本、かぁー。まぁ、暇つぶしにはできそうー」
ブラン「これは…次イタズラされたら使おう…」
ラム「な、なんか寒気が…というより！　これサンタじゃなくてサンタ人形じゃない！」
ロム「…でも、かわいい…」
フウ「でも誰が置いていったんだろう、ミナさんかなぁ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9693y/

超次元ゲイム ネプテューヌmk2 Golm short story

2011年12月25日01時53分発行